

明治用水の開削者

岡本兵松

岡本兵松は、1821(文政4)年大浜村字鶴ヶ崎(現碧南市新川町)に生まれた。28歳で結婚し、父の家業を継いで、味噌、醤油の醸造を行い、回船問屋を経営していた。家業が順調なとき、都築弥厚の子孫である都築増太郎より石井新田(現安城市石井町)の開墾許可された土地20町歩ほどを買い入れて、家業の傍ら開墾を行った。しかし、開墾は予想以上に困難で、水田になったのはわずか2町6反余りであった。その後、幕末期の物価変動と事業の失敗など経済的衰退により、兵松夫婦は明治維新前後に石井新田へ移住した。入植地で百姓としてはげむ中、兵松は、弥厚の成し得なかった用水路開削を生涯の一大決心としたのであった。

明治時代に入り、目まぐるしく変わる行政機関の変動にも負けず、幾度も弥厚の計画に基づく用水開削を県に出願した。やがて、1872(明治5)年、県の統合によりこの地域が愛知県となり、ようやく計画願いが取り上げられた。しかし、県は伊豫田与八郎の悪水計画との合併を強く迫り、二人の承諾を得て測量に入った。この測量の結果、悪水計画の実現は困難であることがわかり、与八郎は兵松の用水計画案に協力することになる。二人は手を取り合って共に農民の説得と資金調達に奔走したのであった。

1876(明治9)年9月、長年待ち望んだ開削の許可がおりた。その後資金の目処もつき、1879(明治12)年1月、いよいよ本流の開削工事が始められた。翌年3月には大浜茶屋村(上倉池)(現安城市浜屋町)まで開削が完成し、続いて大勢の人夫を動員して東井筋と中井筋が開削され、1881(明治14)年には西井筋の開削工事が完了した。全長52kmとなりこの時代を代表する用水として「明治用水」と命名

された。

用水完成後の兵松の生活は、決して恵まれたものではなかった。長年の過労から病気にかかり、用水完成までに多くの資金を使ったため、経済的にも苦しい日々が続いた。兵松は私塾を開き、夫人は駄菓子屋を営んで生計を立てていたことが伝えられている。

また、兵松には俳句をたしなむ一面があり、号を大林居といった。辞世の句に「行く川に 青田の風や 村つづき」を残し、黄金色に実った稲穂を見ながら77歳でその生涯を終えた。

岡本兵松像

石井辻原遊園(安城市石井町)
(兵松公園)

